

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420650

研究課題名(和文)普及期における小規模生活単位型高齢者居住施設の空間構成と使いこなし

研究課題名(英文) A Study on evaluation and problem of the small unit type nursing home in the spread period

研究代表者

橘 弘志 (Tachibana, Hiroshi)

実践女子大学・生活科学部・教授

研究者番号：70277797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：ユニット型特別養護老人ホームにおいて、ユニットケア定着のプロセスを経時的に追跡した。スタッフは入居者の基本的ケアに追われ、リビング空間が使いこなされないという、普及期におけるユニット型施設の課題が確認された。

リビングの環境改善の方針として、(1)入居者の情報をリビングに表出する、(2)入居者が落ち着きを感じやすい居場所とする、(3)スタッフも環境に手を加えられるようにする、の3点を導入し、改善計画を実践した。スタッフが入居者を一方的なケアする状況から、環境とスタッフと入居者とが相互に影響を与え合う状況へと変化が見られ、環境の使いこなしを進める重要性が確認された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify importance of managing and mastering the environment of unit care facilities for the elderly in the spread period. We carried out longitudinal investigation in unit type nursing home during three years. We confirmed typical problems that living spaces were not utilized enough and uniform care was carried out such as conventional facilities.

After some trial and error we found out following three policies of improving the living environment. (1) Expressing various personal information of the residents in living space. (2) Making the places to stay where the residents felt more comfortable and peaceful. (3) Introducing the device that the staffs could participate in making environment.

As the result, we could see a significant change from the situation that the staffs provided one-side care for the residents into the situation that the staffs, the residents and the environment affected mutually.

研究分野：建築計画

キーワード：高齢者施設 小規模生活単位 普及期 使いこなし 環境改善 ケア環境 ハードとソフトとの整合性

## 1. 研究開始当初の背景

近年、要介護高齢者を対象にした居住施設において、従来の大規模な生活単位から小規模生活単位へと変化を遂げてきている。2002年に「小規模生活単位型特別養護老人ホーム」として制度化されてから10年を経て、小規模ユニット型施設は導入期から普及期に突入している。理想を追求しようとした導入期に比べ、普及期では制度を前提としてその基準に沿う形で多くの施設が建設されつつ、ハードとソフトがかみ合っていない事例が増加している。そこでは、スタッフのマンパワー不足とあいまって、ケアの質と入居者の生活の質が本来のユニットケアで目指していたものと乖離している実態がある。近年では、小規模ユニット化に対する疑問も呈されるようになり、施設の絶対数不足が謳われるようになると、より低コストで運営可能な従来型の施設形態を見直すべきという声も出てきている。その背景には、小規模生活単位型の空間構成に関する知見が十分でなく、適切な空間構成が実現されていないこと、そして実際の生活の中で小規模生活単位型の空間をうまく使いこなせていないことが、課題として考えられる。

## 2. 研究の目的

1) さまざまな現場において、ハードとソフトとの整合性を精査し、生活の質の面から評価を行うこと。不整合を起ささないケアの質を探ること。2) 小規模生活単位型の空間構成を、ケアの質、生活の質の側面から評価し、より適切な空間構成のあり方を見出すこと。3) 現場における空間の使いこなし方の現状を捉え、空間のポテンシャルを活かすような使いこなし方を見出すとともに、その手法や技術を確立すること。

## 3. 研究の方法

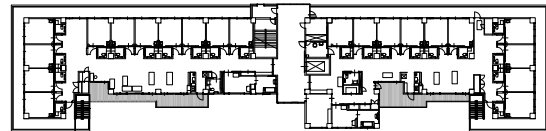
2012年に開設したユニット型特別養護老人ホームF施設を対象として、継続的な調査を行った。まず、入居者の生活調査およびスタッフのケア調査を行うことで、施設のハード、ソフト、および入居者の生活の現状を把握した。その上で、ハードとソフトとの整合性の観点から空間の使われ方について分析・評価し、使いこなしの視点からの課題設定を行い、提案・実践に結びつけていくものである。

(1) 入居者の生活調査：対象ユニットの入居者全員を把握した上で、7～19時にかけて共用空間を15分おきに巡回し、各入居者の居場所、行為等を平面図に記録した。

(2) スタッフの追跡調査：対象ユニットの全スタッフを対象として、7～19時の間1対1で調査員がスタッフを追跡し、1分間隔でケア行為、対象者、動線等を記録した。

(3) 入居者へのヒアリング調査：ふだんの生活の様子や施設に対する要求、自宅での生活などについて聞き取りを行った。

(4) リビング環境改善の実施：スタッフと打ち合わせを重ね、意見を取り入れながら、環境改善方法を提案し、施設側の協力を得ながら実施する。実施後には事後調査を行い、またスタッフとのワークショップを行い、その効果を検証するとともに課題を抽出した。



(図1) F施設居住階平面図



(図2) F施設の従前リビング

## 4. 研究成果

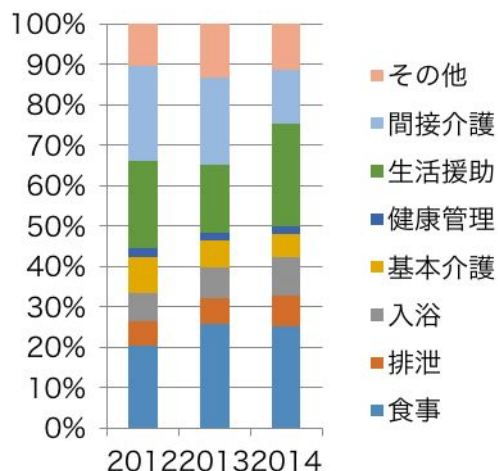
### (1) 経時的変化

施設開設直後の2012年から2015年まで継続的に調査を行い、ユニットケアの定着状況を把握した。調査時期や入居者の状態などの影響により、年によって若干の変動はあるものの、全体としては大きな変化は認められない結果となった。

入居者の生活はリビングよりも居室での滞在が長く、リビングでは多少のコミュニケーションは見られるものの、個人的行為や主体的行為はあまり多くない状況が続いている。もともとリビングにはイス、テーブルの他あ

まり家具や小物類が少なく、生活感が感じられない状況が続いている。一方で居室がプライベート環境として充実しているとも言いがたく、リビングにいる理由がない、スタッフが居室に誘導する、という理由から居室での滞在が長くなっている。

スタッフのケアは、食事・入浴・排泄を中心とする基本的介護が大きな割合を占めており、入居者の要介護度の上昇も影響して、その傾向はむしろ増加している。同一法人が運営する従来型施設と比較すると、入居者に対する声かけは多いと言えるが、双方向の会話が成立することは少なく、様子見の声かけや一方的な指示などが多くを占める。要介護度によって入居者の座席を分けて配置しており、その結果介護の必要性の高い入居者に対して関わりが偏る傾向が明らかとなった。



(図2) スタッフのケアの変化

施設開設後3年という期間が過ぎ、小規模ユニットという形態の中で、本来の理念とするユニットケアは時間の経過とともに少しずつ醸成されていくわけではなく、むしろマニュアル的なケアに移行しようとする傾向もないとは言えない状況である。

### (2) 環境改善の実施1

2013年、F施設の2ユニットを対象として、リビングに観葉植物を配置して環境改善を試みた。設置前後を比較すると、入居者の居場所や行為には変化があったことが確認されたが、これらの変化は、入居者の自立度の変動と新規入居者の影響が強く、植物の設置による効果とは言えなかった。単に植物という刺激を与えただけでは、入居者は関心を示す

ことも少なく、生活そのものに影響を与えないようだった。

F施設と同一設計者によって、自然と建築の一体化を目指し、どの空間も外部の庭に面するように設計されているA施設(2007年開設)と比較を行った。入居者が植物や外部と関わる場面を抽出すると、平均要介護度の高いA施設のほうが、植物や自然との関わりが多く、関心も高い結果となった。入居者の自発的行為や交流行為にも差がみられ、F施設では自立度の高い入居者にしか見られなかったが、A施設では比較的重度であっても維持されていた。

2施設の入居者の生活の質には、入居者の要介護度に起因しない大きな差が見られた。入居者がそれぞれの環境を「自分の住まい」「自分の領域」と実感している度合に大きな差があることが示唆された。自分の住まいとしての感覚が薄いことが、環境の変化や外部の様子に対する関心や反応の薄さにつながっている可能性がある

### (3) 環境改善の実施2

2014年、F施設の2ユニットを対象として、入居者の新たな居場所を設ける環境改善を実施した。スタッフを交えたワークショップを複数回行い、リビング内の家具配置を多少変更し、パーティション家具で仕切ることで、ダイニングテーブル以外に立ち寄れる居場所となることを意図した。



(図3) 入居者の居場所の構築

入居者全体としては、生活に大きな変化は認められたとは言えない状況であった。ただし個人に注目すると、ユニットによって、新しい居場所を活用するようになった入居者も見られた。今まで居室とダイニングの自分の

席を往復するだけの生活から、自分で選択できる居場所がもう1カ所増えたことになる。入居者の居場所として活用されなかったユニットを調査すると、その場所がスタッフの記録場所や洗濯物置き場としても使われていた。入居者にとっては、スタッフの場所が増えただけで、自分たちで使ってよい場所であると認識していなかったことが確認された。

これらの結果から、スタッフは入居者を介護の対象として捉え、リビングも介護を施す空間として捉えていることが示唆される。入居者側も、ユニットの空間を自発的に生活を営む場所として捉えられていない以上、大きな変化をもたらすには至らなかったと考えられる。ただし、実践前はスタッフは環境改善に懐疑的であったが、実践後には危惧したような不具合がとくに発生することもなく、空間の使い方に変化が生じたことが実感され、スタッフに多少なりとも意識の変化を認めることができた。

#### (4) 環境改善の実施3

2015年も前年同様、スタッフを交えたワークショップを重ねた上で、新しい環境改善案を提案し実施した。これまでの結果を踏まえ、環境改善の方針として以下の3点を導入することとした。

(1)入居者の情報をリビングに表出する。リビング空間に少しでも馴染みの情報を増やし、またさまざまな行為や会話のきっかけとなることを意図して、写真や個人の作品など、入居者情報のディスプレイを積極的に行った。

(2)入居者が落ち着きを感じやすい居場所とする。スタッフの仕事場所として認識されないよう、また入居者の従前の生活の様子も考慮して、より馴染みやすいと感じられる和風の要素を取り入れたコーナーを設置した。

(3)スタッフも環境に手を加えられるようにする。ブラックボードを設置して、スタッフが日付やメッセージを書き込めるようにした。またスタッフの家族写真などもディスプレイし、スタッフもともに生活している一員であると感じられるようにした。



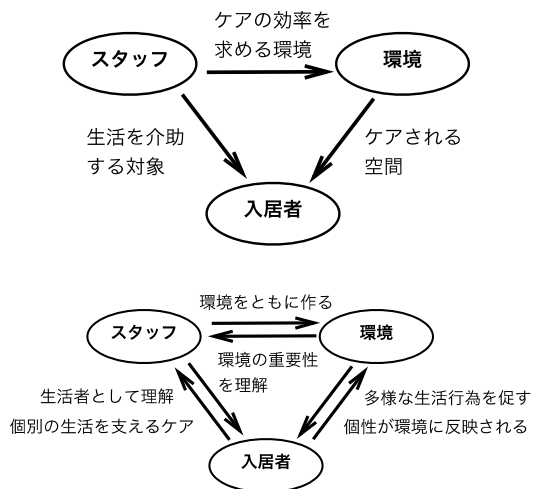
(図4) ディスプレイコーナー



(図5) こたつコーナー

全体としてみると、やはり大きな変化をもたらしたとは言い難いが、個人に注目すると、新たな行為の場面を見て取ることができた。展示を見回ることと日課にしたり、写真を見てふと立ち止まる、展示コーナーの横に配置したイスを利用する、自らコタツの場所に行って座る、など、これまでには見られなかった行為が発生していた。スタッフからも、コタツに連れて行くと落ち着く入居者がいる、リビングで話のきっかけが増えて声をかけやすくなった、などの意見を聞くことができた。

入居者の生活に少しずつ変化が生まれたが、スタッフの環境に対する姿勢には確かに変化が認められ、環境をよりよく使いこなしているとする姿勢や、自らも環境に手を加えて改善していく試みが見られるようになった。自ら環境に手を加えることで、入居者の反応を引き出すことができることに大きな意義を見だしており、環境が入居者に与える影響をスタッフがあらためて確認することができたと考えられる。



(図6) スタッフの意識の変化

### (5) 総括

理念よりも制度による基準が先行してつくられた普及期のユニット型施設においては、時間の経過に伴い自然とユニットケアが実現・定着するわけではない。ユニット内のリビングを中心とした空間の使いこなしを進めることの重要性があらためて確認された。環境の使いこなしとは、ただそこにさまざまな要素を持ち込んで環境を改変させることではない。生活する上でのさまざまな情報に満ち、自分たちが主役であると入居者が思える環境へとすることであり、それはスタッフもともに作り上げていく環境とする必要がある。入居者の行動を引き出す刺激として環境改善を実施しても、大きな効果は望めない。入居者にとってもスタッフにとっても、施設を、「ケアの施される場」=介護という仕事のための空間という認識から、「入居者の生活の場」=日々環境とやりとりしながら生活を営む空間という認識へと変化させることに他ならないだろう。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 6件)

- ・内山裕子・橋弘志「従来型とユニット型にみる入居者の生活の差異 普及期における小規模ユニット型高齢者居住施設の評価と課題(その 1)」日本建築学会大会(北海道大学)学術講演梗概集 E-1 p.493-494 2013.9
- ・橋弘志・内山裕子「従来型とユニット型にみるスタッフのケアと関わり 普及期に

における小規模ユニット型高齢者居住施設の評価と課題(その 2)」日本建築学会大会(北海道大学)学術講演梗概集 E-1, p.495-496, 2013.9

・橋弘志「高齢者施設における生活と植物・自然・外部との関わり」人間・環境学会第 2014 年度大会(大阪教育医科大学), MERA Journal 33, p.71, 2014.5

・橋弘志「従来型施設のユニット化改修の効果と課題 普及期における小規模ユニット型高齢者居住施設の評価と課題(その 3)」日本建築学会大会(神戸大学)学術講演梗概集 E-1, p.211-212, 2014.9

・伊藤有里佳・橋弘志「開設後 3 年間にみるユニットケアの定着と課題 普及期における小規模ユニット型高齢者居住施設の評価と課題(その 4)」日本建築学会大会(福岡大学)学術講演梗概集 E-1, 2016.8

・橋弘志・伊藤有里佳「ユニットリビングの環境改善とその影響 普及期における小規模ユニット型高齢者居住施設の評価と課題(その 5)」日本建築学会大会(福岡大学)学術講演梗概集 E-1, 2016.8

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

橋 弘志 (TACHIBANA, Hiroshi)  
 実践女子大学・生活科学部・教授  
 研究者番号: 70277797